

2025 Asian ChemoSensory Meeting in Korea (Pre-ISOT)

堀江 謙吾

岡山大学 学術研究院医歯薬学域

「韓国でアジアの化学感覚研究者が集まる学会が開催されるから参加してみたらどうか」と所属研究室の岡山大学口腔生理学分野の吉田竜介教授から打診をいただき、恐縮ながらこの学会に参加を決めたのは2025年7月の夏真っ盛りの時期だった。この学会は2025 Asian ChemoSensory Meeting in Korea (ACSM) といい、4年に一度開催される世界最大の化学感覚国際学会である International Symposium on Olfaction and Taste (ISOT) のプレ学会として、次期開催地域の近隣国で開催される前哨戦のような学会である。通称 Pre-ISOT と呼ばれ、ISOT を盛り上げるに相応しいトップリサーチャーが集まる場である。化学感覚分野に参加して日が浅い私がこのような場に参加しても良いのかと戦々恐々としながらも、2025年5月にアクセプトになったばかりのプロジェクトをポスター発表しようと計画し、一流の研究者たちとのディスカッションを夢見てアブストラクトを提出した。無事に採択され韓国ソウル行きの航空券と宿を手配し学会へと足を運ぶこととなった。

韓国への来訪は2022年にポストドク時代にテジョン(大田広域市)でのシンポジウムに参加して以来3年ぶりであった。Pre-ISOTの会場はソウル市街地に位置する延世大学(Yonsei University)である。日本から韓国ソウルへのアクセスは大変良く、神戸空港から約2時間で仁川国際空港に到着し、予約した空港鉄道A'REXに揺られること50分ほどでソウル駅に到着した。延世大学から程近い新村駅(シンチョン駅)の近場にホテルをとり、ほとんど迷うことなくホテルへと予定通り到着した。ソウルは複数の地下鉄線が乗り入れる巨大な駅であるが日本語の案内も多数あり地下鉄での移動は想定より簡単であった。到着後は周辺を軽く散策し、早々にホテルに引き上げ、ポスター発表の準備に勤しんだ。というのは建前で、実際には準備はほどほどに切り上げ、初めてのソウルの夜を満喫するべく、人で溢れかえる街へと散策に繰り出すこととした。会場となる延世大学はソウル駅から電車で20分ほど、新村駅からは徒歩で15分ほどに位置する韓国3大大学の一つである。延世大学から新村駅へは大通り

が続いており、延世大学をはじめとする近隣の学生が多く暮らす街として知られている。学生が多いからか、街中には飲食店が乱立しており、食欲を掻き立てる韓国ごま油の香りがそこかしこで立ち込めていた。新村駅から西へ歩くと韓国随一のショッピング街である弘大(ホンデ)へと辿り着く。弘大には服屋やアクセサリー店、コスメ店などが立ち並びお土産選びには最適な街である。頼まれたお土産を一通り買い漁り、辛味のあるビビンバやごま油香るキンパに舌鼓を打ち、翌日のPre-ISOTへの英気を養った。程よい緊張感と高揚と満腹感に包まれ韓国初日の夜を終えた。

翌日、Pre-ISOTの1日目は昼過ぎから開始の予定であったため数十分前に到着してポスター準備を済ませることにした。実はこの時も一つのミッションを吉田教授より課せられていた。2026年2月末に岡山で開催する第22回国際シンポジウム“味覚嗅覚の分子神経機構”(ISMNTOP)のフライヤーを学会で配布し宣伝してくるというものである。顔も知られていない若輩者の私がそんな宣伝をしていいのかとビクビクしていたが、なんとかPre-ISOTのチェアであるSeok Jun Moon教授を探し出し、フライヤーを置かせてくれとお願いすることに成功した。Moon教授は気さくに引き受けてくださり、「どうせなら登壇してみんなの前で宣伝したらいいのでは」と提案をくださったが、冷や汗をかきながら丁重に辞退させていただいたのはいい思い出である。1日目は嗅覚セッションから開始し、韓国、中国、そして日本から参加した研究者が最新の研究成果を講演した。プレナリーレクチャーではヒトの嗅覚に関する最新の研究が発表された。一日目の夜には懇親会が開かれ、参加者は韓国料理を肴に研究の話に大いに花を咲かせた。

2日目の午前は味覚セッションから始まり、こちらも各国の研究者が最新の知見を講演した。昼にはポスターセッションが行われ、各国の若手研究者がそれぞれの成果を熱心に発表し、大いに議論が盛り上がっていた。私のポスター発表にも多くの研究者が来てくださり質問を多数いただいた。論文を読んで聞きにきて

くださった方もおり、議論が尽きない大変有意義なポスター発表となった。無事にポスター発表を終えた安堵も束の間に、すぐに午後の化学感覚デコーディングと行動セッションが開始された。このセッションでは各国の研究者が嗅覚や味覚の脳情報デコーディングを介して神経活動から脳機能や行動を読み解く最新の知見を講演した。最後に化学感覚シグナルの分子から行動までを網羅したプレナリーレクチャーで Pre-ISOT は締め括られた。

Pre-ISOT では化学感覚の入り口となる受容体の結晶構造解析に始まり、化学感覚を処理する脳機能の解明、化学感覚によって引き起こされる脳情報のデコー

ディング、化学感覚が引き起こす行動の変化まで幅広く焦点を当てた最新の知見が議論された。これらの研究はマウスを対象とするのみでなく幅広い動物種を対象として展開され、化学感覚の多様性とその理解が大きく深まっているように感じた。味覚の分子メカニズムに関する発表をした私には、普段馴染みのない嗅覚の講演は新鮮に感じ、多くの学びを得ることができた。また、化学感覚の脳情報デコーディングや行動制御は、この分野が新たな領域へと進展しているように感じられた。2028 年の ISOT ではさらに進化した化学感覚研究を拝聴できると考えると、今から心が躍る気分である。



夕刻の延世大学。近代的なビルや西洋風の建物で広大な敷地が埋め尽くされていた。